

# 閨作品集

守屋明俊選

五十音順（今回はナ行から）

## 春の雪

東京長井敦子

空いまも昼間のあをさ寒茜  
忙中閑山雀一羽庭に待ち  
この庭に夜な夜な狸来てたとは  
寒雀愛しひと口毎にまはり見て  
さざ波のときに破らる鳩の湖  
春の雪夜の街灯に執着す  
梅散らす目白の体のしなやかさ  
めぐる春「閨」と歩む日々新た

## 磯巾着

東京中嶋きよし

廃線の北の駅舎や木々芽ぐむ  
ゴム風船吹き込む息に悟る老い  
残照の湖に相寄る残る鴨  
八十路未だ旅の途中や蓬餅  
地震跡の耕作放棄地花明り  
鷗鳴く小樽運河や春の雪  
満ち潮や磯巾着の花笑ふ  
ガード下田楽焼の味噌熱し

## 春雷

東京中村敬子

春雷や三周年となる「閨」  
父の忌の二月悲しくなつかしき  
春月や眠るに惜しき湖平ら  
二月の紺碧の空息ぬきに  
春一番般若は笑ひ声もらし  
夕べまだ日の明るさに鱈焼く  
米寿まで生きて不美人玉椿  
轉りの花やぐひと日採血す

## 吾が庭発

東京 中村 東子

仁王門脇の七輪干鱈売る  
前世は大森界限しじみ汁  
スナフキンに似てゐるをんな団扇干す  
春昼のかっこうと鳴く鳥かな  
春愁のカフエアラビアンミュージック  
瞬きにリニアの去りぬ露の臺  
吾が庭発はこべらのペペロンチーノ  
花冷や太極拳の手の火照り

## 麗 日

埼玉 中村 幹子

麗日や師の下三歳和の輪なり  
百合鷗ゆれて河口に紺飛白  
青き踏みあの日の歌は早春賦  
心して明日への一步青き踏む  
花片と寄らばひらりと小蝶舞ふ  
春場所の勝越し力士諸手挙げ  
春雪や二度寝の目覚め殊の外  
悴むや地震の能登には吹雪の報

## 春憂ひ

東京 野 沢 慶子

落雪の音豪快や午後晴れて  
黄の海に酔うてゐるやう蝶乱舞  
つき抜けてキャベツつくと花咲かす  
水の輪に降る様見せて春の雨  
春蘭や夫は施設に入りしまま  
一片の花も見られず施設夫  
子のあらば負うて桜を見せましを  
付度せぬ猫の昼寝や春憂ひ

## 連 翹

東京 野 村 雅美

カーテンの影ゆがみをり春の昼  
春疾風挨拶の文字散らばりぬ  
新薬の効きより強し花粉症  
老犬の眼濁りし鼻の春  
花辛夷年に一度の道しるべ  
春昼のあんぱん一つ悦に入る  
連翹や許しの光満ちて来る  
フリージア別れと出会ひ交差する

## 米寿白寿

東京橋本恭子

鶴引くやもう朝市のたため町  
梅咲くや奈良井土産の夫婦椀  
梅ほつほつ鶯顔し鳥集ふ  
梅の色違へば空の色違ふ  
路地一つ統ぶ夕闇の沈丁花  
扶養欄の米寿白寿や納税期  
白木蓮あれば祈りの手の形  
廃校の百葉箱に蜂育つ

## 風光る

神奈川 長谷川 菊男

岩肌に光のしづく草青む  
赤鳥居の続く山路や春の雲  
ビーナスの像のしなやか春の庭  
鎌倉のテラスのランチ風光る  
菜の花の香に畑仕事ひと休み  
幼子の何かあるよと春の水  
せせらぎのひびきかるやか雪柳  
つくづくし一つ見つかりつぎつぎと

## 木の芽伸ぶ

東京長谷部幸子

貝殻が貝殻抱いて春の磯  
駅前の大道芸に春膨れ  
靡かせるイタリア製の春シヨール  
薄氷を割つて小川の水を汲む  
一合のボトルを置いて分葱和へ  
蕨狩りその夜の夢も蕨の野  
年ならば一歳程か芽吹き山  
孤独好き群れるのも好き木の芽伸ぶ

## 春

東京畠山奈於

ひと挿しの梅が枝開く朝の卓  
意地悪も感謝もわたし聖灰祭  
咽せし夫息取り戻す涅槃西風  
かげろふや後ろ姿の足音消ゆ  
満月の雲出入りする桜かな  
再会も別れもありて春ゆけり  
イースター蒼き未明の月あまねし  
早朝の鳥の合唱筍掘り

## 春

東京 浜田 優子

朝よりの小雨やまたも冴返る  
春めくや土持ち上ぐる何かの芽  
付添ひて聞く予後のこと春きざす  
君付けで呼び合うてゐる新社員  
青き踏むベビーカーより降ろされて  
絶好の花見日和の蕾かな  
句友の歌に拍手喝采花見船  
春休み祖父に王手と得意気に

## 花ミモザ

東京 原田 ミチ子

雪晴間手放す家具の重さかな  
重ね着る遠き日編みしものばかり  
両手上ぐ乙世代の雪だるま  
あるがまま生きると決めて海雲食ぶ  
春光や棲み分け上手き野の小花  
三月の光の中に絵馬の束  
催花雨しきり「閨」の宴間近  
花ミモザ若き家並つづく道

## 冬 灯

東京 春田 千歳

フェイドアウト非常口より雪匂ふ  
毛皮着て百年は生きてる老女  
みしみしと家鳴る夜の雛祭  
雛市のしんがりは父にこにこと  
鶴の羽根いち枚拾ひ黙示とす  
雪解川父にはぐれし日のありぬ  
椿掃くふとこの世から浮いてをり  
雛千体ひとりひとりが耐へてをり

## 揚雲雀

東京 平野 豊雄

センターの追ふ白球へ揚雲雀  
気管支のごろごろ鳴りし二月かな  
寒戻る無言電話の耳と耳  
くぐもれる鳩の声して街おぼろ  
おぼろ夜や水漬きて呼吸をする胎児  
春疾風背中ど突かれ踏躰踏む  
アツアツと電車より見る桜かな  
花筵サツカーポール転々と

## 春の湖

東京 平野 美子

はこべらに手紙のやうな鳥の羽  
画用紙に春の湖持ち帰る  
セーターもズボンも破れ句集成る  
銅像の一人が動き万愚節  
復活祭路上に小鳥死す夕べ  
川原鶉の棺の箱を捜しけり  
うららかやスカイツリーにちぎれ雲  
ゆく春の鷗の羽の骨透けて

## 選 択 肢

東京 本多 遊子

立春大吉にぎり一貫たまごから  
節分会飛距離のぼせぬご住職  
啓蟄やエレベーターのどれも上  
朧夜のフレンチめきし理髪店  
ごはんに合ふライスコロケ亀鳴けり  
卒業の日や図書館に司書一人  
選択肢は他にもあつた鳥帰る  
カウンターに並ぶ小芥子と風信子

## 菜の花

東京 松本 余一

青春の罪のひとつに花林檎  
ホスピスの部屋に遣りし紙籬  
春の雨深夜のうどん販売機  
菜の花や夕月かかる太平洋  
仏足石くぼみにたまる花笈  
かげろふは神のいたづら遠めがね  
落椿地球はいつも傷ついて  
橋の名の残る暗渠や柳絮飛ぶ

## ひなあられ

東京 持田 きよえ

雪折れの枝の香を拾ひ上ぐ  
手のひらはやさしき器ひなあられ  
ひなあられこぼれやすくて溶けやすく  
空つぼの通帳二冊鳥雲に  
東京に年月重ね今日梅  
「雪国」に古びし葉春ともし  
川沿は喃語鳥語の花筵  
落城の涙はすみれ地に群るる

## 深川

東京 森尻禮子

深川に園その女の墓や鳥雲に  
江戸前の旬の浅蜷めぞさあ喰ひねエ  
ぶっかけ飯の浅蜷ふつくら小名木川  
緑摘む水面より立つ長梯子  
なかぞらの風の手応へ風の糸  
苗札にピンクパンサー即捕獲  
春霞や永久の別れのたうとつに  
ひしめきてひかり分けあひヒヤシンス

## 春深し

東京 山田雅子

年逝くや地球は人の咎まとひ  
聖樹仰ぐ戦に惑ふ児ら想ひ  
おのが枝の影に散りゆく寒桜  
光散らし羽搏く鴨や春深し  
花万蕾海舟像は海を指し  
うらかな日を賜りしベンチかな  
漂ふ水母吾妻橋より厩橋  
何にでも終りありけり百日紅

## 蒲公英

東京 横須賀智子

班ごとにとたんぼぼ一本解剖す  
折りとれば乳のじわりと鼓草  
蒲公英の絮毛耳には入れるなど  
部屋ごとに百均メガネ置く日永  
母の日や針ありつたけ糸通す  
数百の目玉何見る白子干  
絵日記の為の朝顔蒔きてをり  
「ハゲ天」のオヤジ鉢巻汗を吸ふ

## 花菜風

東京 和田郁子

月影の淡き東京いぬふぐり  
啓蟄や動く里山守る会  
尖りたるくれなるの芽に春の雪  
「東の空が真赤だつた」三月十日  
籠り居の踏み出す一步花菜風  
軽やかな風に初蝶職を辞す  
めぐる三月復興記念樹満開に  
菜種梅雨もつれし話聞いてをり

## 春の音

東京 阿部 草薫

口ばかりポロツと春の音こぼれ  
大船観音ぬおつとや春眺めをり  
浮き世の春ゆらりゆられて屋形船  
空の青切り取つて行け百合鷗  
隅田川スカイツリーと海月かな  
胸もとをはんなり染めて春ショール  
木もれ日の春の光に何を見ゆ  
来訪神“天下御免”の暖かさ

## 早春

東京 伊澤 やすゑ

早春の降車ボタンは海へ押す  
枝先にひかり二月の幕が開く  
春浅し舐めて小粒のチョコレート  
春なれや富士のお山の歌ひだす  
おいとまや富士をすつぽり春霞  
向ひ風そして追ひ風春一番  
地球堂書店閉店春寒し  
ちよいちよいと目鼻つけたきつくしんぼ

## 芽

埼玉 牛込 はる子

子供等の確たる未来牡丹の芽  
新校舎なるや鈴懸新芽立つ  
狂風やひとひ芽柳立ちむかひ  
喪失の歯の深き穴春嵐  
初花や波音高き船着場  
山頂の光あまねし青き踏む  
花冷えの拳手武器輸出反対す  
新しき句帳とペンや青き踏む

## ふはふは犬

東京 内海 範子

春一番ピキッと開ける缶コーヒー  
卓上にノート歳時記桜餅  
春シヨールはづしや開演ブザーなる  
たゆみなく俳句作りや春きざす  
薔薇の垣くぐりて覚悟齒科医院  
桜まじサラサラサラと髪揺れ  
紅椿掃いては落ちて理髪店  
蒲公英の絮ふはふは犬にまとひつく

## 花も悼む

埼玉 大下 壽櫻

剪定にランニングにと人始動  
大地から滋養を人へ蒔葎草  
幼児期の追憶醸す紫雲英摘み  
紅白緋妍を競ひて桃の園  
空を飛ぶ夢は叶はず玉椿  
長雨に含み遅るる桜の芽  
愛し子と思ふ若木の初桜  
葉に隠れ花も悼むや逝きし人

## 梅白し

東京 太田 裕子

意地張りしのちの虚しさ梅白し  
見つめ合ふこと許されぬ内裏籬  
夜の梅たちははの来て亡夫も来て  
はくれんの新芽むくむく湧く望み  
アネモネや中村紘子の黒目勝ち  
断念てふ語の重きこと花ミモザ  
雪解雫身にしみ透る経のこゑ  
芹の香もきりり束ねて地の八百屋

## 春光

埼玉 小河原 政子

残雪を投げ合ひて子等高笑ひ  
パソコンに日がな一日木の芽晴れ  
降る雪に解体作業目を配る  
閉院の今年も咲ける辛夷かな  
春光や出かけようとの子等の声  
春暑し雄叫び上げる勝ち投手  
当世の八掛人生チューリップ  
暗闇に雪と紛ふや雪柳

## 盆梅

京都 小野 直美

墓磨く背にぼつぼつと春の雨  
悠久の時の証人盆の梅  
背丈越す高さ盆梅薫りたつ  
みづうみの波の乱れや木の芽風  
なごり雪荷降しすんで呆けたり  
遠山は竹の秋なり淀流る  
苔むした門柱飾る落椿  
春あかね父としぼしの長電話

## 竹の秋

東京金子かほる

三日程同じ前掛け初明り  
被災地の絆を繋ぐ寒の水  
春一番街の姿の一変す  
あたたかや椅子の座布団滑り落つ  
金色の風の静けさ竹の秋  
うららかや川鶉も飛び交ひて  
細波の光に自在海月かな  
託児所のお昼寝時間桜咲く

## 春

東京金田知子

鮮やかな反物架かる春の川  
開始前漫画読んでる受験生  
合格し慌ててスーツ買ひに行く  
スーツ着てちよつとおすまし入学児  
心までパステルカラー春の服  
首元に桜で染めし春ショール  
墨田川花はまだかと巡りたり  
満開の花の憂ひや我らまた

## 目覚め

東京金田喜子

土筆摘む夕餉待つ間の玉子とぢ  
咲き誇る椿の下に赤絨毯  
牡丹鉢目覚めの時か赤芽吹く  
花はこべ芽吹きを待てず文鳥逝く  
川波の揺れに乗り乗り百合鷗  
芳香の小径辿りぬ沈丁花  
高層ビル谷間の川に桜映え  
賑やかに仏の座揺れ隅田川

## 踏青

埼玉菊地孝枝

踏青や雲の影置く開拓碑  
剝落の樹皮を嵌めこみ野に遊ぶ  
石仏の笑み微かなる花曇り  
菜の花の摘み痕灰と光りけり  
何つかむしやぼん玉子等追ひかけて  
新聞に左脳目覚むる木の芽時  
焼場より見下ろす街の薄霞  
葬列や畑渡りくる雉の声

いささ川

東京北 好夫

初句会人形焼きの香ばしき  
梅苔むぼんぼん菓子火爆ぜる前  
囀や歩みすずろにいささ川  
礫の如よぎる鳥影春一番  
天離る鄙にも光三極咲く  
厨から米を研ぐ音春眠し  
花いまだ蒼穹深き墨田川  
禁門に残る弾痕花の雨

春の夢

東京木山有衣

柚子風呂の黄に染まりつつ黒田節  
窪地にも届く薄れ日近松忌  
浮寝鳥魔力のやうな眼の光  
浜御殿へ行く船速し彼岸西風  
天ぷらの食べきれぬほど春が来て  
海原を永遠に止どまる春の夢  
野良猫のめつきり減つて猫の恋  
石段の行く手に千年の椿

喫茶去

東京久保田勝一

風落ちて白梅うるむ崩れ堀  
金縷梅の花影にまあお茶どうぞ  
誰でもない顔して春の麗子像  
浮かれ世の株も桜もさいたかね  
歌ふ美女に罌の気配す花の森  
春泥やどこにも君は戻れない  
ニユートリノ何見てゐるの春の雨  
春の潮船の鴨居の低きかな

蛸蚪の紐

埼玉栗原季星

針山もかくや満天星新芽吹く  
駅頭の兜太新句碑寒明くる  
爪切つて老いのひと日や日脚伸ぶ  
遠汽笛渉る蒼空つばめ来る  
手に取らば持ち重りして蛸蚪の紐  
連山を裸婦像見つむ忘れ雪  
涅槃西風大門残る館跡  
桜双樹の片方伐られ阿弥陀寺

## 花 見

東京 小 塚 あゆみ

一輪を探して歩く花見かな  
花蕊の残れる梅の木に疲れ  
能登の畔それでも土筆出てこいよ  
いたいや能登焼跡のヒヤシンス  
閑日の俳句談義やひなあられ  
こんなにも仏の座あり戦あり  
雛の日に洋食たべるあまのじやく  
そこここに小さきすみれのひそみをる

## 菜種梅雨

神奈川 小 泉 まり子

東風少し吹き始めたと瓦職  
シンプルにポトフ味はふ四日かな  
烏瓜一つ真赤に科犯し  
見つめ合ふことなき雛一途なり  
喜びのあふるることくヒヤシンス  
初初しさつまの梅のくれなるは  
妻子のみ福寿草咲く国に住み  
この先はきつとよき事菜種梅雨

## 桜さくら

東京 幸 喜 美恵子

桜咲く曾孫は木花之開耶姫  
桜さくら八十五歳はまだ未完  
花の下母はどつこいしよと坐る  
菜の花のあなたに雪の津軽富士  
花ミモザ童女の髪に天使の輪  
糸桜揺れて一輪車を通す  
雨女は誰か花見の御一行  
君の名を思ひ出せない花粉症

## 名草の芽

埼玉 小 濱 けえ子

手招きに母国の違ひ花曇  
石の上亀も見上げる花見かな  
花衣ギヤルの小洒落たローヒール  
病夫つまの髭剃る子の涙花月夜  
リハビリの趾骨の癒合青き踏む  
築山へじやんけんグリコ名草の芽  
双葉ひよつこり空つぼの鉢の穴  
天麩羅の春菊を嚙む主役の香

卒業

埼玉 小林 ゆきお

卒園歌張り上ぐあんなこんな事  
新しの門出と卒業式辞かな  
行く雁へたちぶるまひの両手撒き  
行く雁やこれぞ地震跡津波跡  
これやこの今生の花車椅子  
桜餅左党のはずと思ひしに  
ダージリン淹れお持たせの桜餅  
春祭転げて拒む稚児化粧

きらら

東京 小林 玲

黙禱のつゞく睦月や秋津島  
湧水のしのび音ほど水の春  
小流れの泡沫を追ひ目借時  
春蘭の花芽たしかむ遠散歩  
老桜の燦然と咲く知命かな  
老桜の辺や若木のすこやかに  
海図なくば辿り着けない花伐  
古本の処遇迷へばきららかな

惜春

千葉 斉藤 久美子

いつの間にかペン牝牝消えて桜餅  
春愁ふもやしの髭をとりながら  
真青なる父の忌の空鳥帰る  
葱坊主父は終生夢持たず  
投函は検査前日朧月  
先づ歳を聞かれて応ふ万愚節  
春シヨールいつもの「銀の鈴」で待つ  
惜春の音もなく発つ新幹線

芽吹き

東京 島 昌子

恋はもういいよと眠る春の猫  
音信のとだえし人よ春の星  
呆けてると笑ひとばせり春帽子  
梅が香につつまるる丘汀女句碑  
追ふやうに追はるるやうに鳥の恋  
豆撒きや追ひ出せぬ鬼あといくつ  
腰痛のややに薄らぐ春の風  
なんじやもんじや芽吹く光の草田男碑

## あの頃は

東京 嶋谷宗泰

草萌や肩組み歌ふ「若者よ」  
春灯やスタインベックを丑の刻  
春愁のサッチモを聴くジャズ喫茶  
メーデーの打上げホルモン焼鳥屋  
日劇はロックンロール春の月  
春浅しライندگانスは浅草で  
空財布春泥の靴みがきたし  
葱坊主落第坊主カラ天気

## 蘆の角

東京 清水悠太

初夢や龍の為したる大あくび  
借覧の発禁本や氷解く  
春一番煩惱放棄風まかせ  
蘆の角宇宙静かに眠り解き  
晩年を何に拘る別れ霜  
人の為す不条理硬し焼栄螺  
穏やかに嘯く水面春の海  
この星に生まれし謎や蜃気楼

## 青き踏む

埼玉 首藤久枝

後悔をさらりと捨てて青き踏む  
反骨の父を恋ひたり梅真白  
踏青の大きな手足未来へと  
アイドルの手足キレキレ風光る  
春の川つがひの鳥の多きこと  
きら毀し鷗護衛の花見船  
戦さなき時代であれよ花の雲  
風渡るものの芽たちを覚まさんと

## 春服

埼玉 正田和子

万両は食べつくされて春の雪  
春の風邪いくつも雲を見送りぬ  
春雲の行方からすの行方かな  
猫の耳ピクリと動く春の夜  
日に六千歩課して花見は川伝ひ  
ひよつこりと草より現るる雀の子  
春服を買ふ意気込みの靴をはく  
ハンカチの四角揃へて春灯

## ほほざし

埼玉新海 あぐり

閨日の駄句も秀句も華やげり  
過疎村の最初の光いぬふぐり  
残る鴨程よき距離を保ちつつ  
春宵や酔うて亡き友呼び寄せる  
猷体の友に猷杯春深む  
頼刺しや戦の果てが見えぬまま  
野火や野火プーチントランプネタニヤフ  
消えちまつた裏金いづこ田螺鳴く

## 猫の目

岩手菅原淑子

きさらぎや思はぬ人の計を知りぬ  
猫の目と会ふや二月のカレンダー  
腰低き置葉屋や冬ぬくし  
煮林檎にして食べもする齢かな  
春の虹何かいいことありぬべし  
隣よりちらし寿司来てひなまつり  
卒業の別れがたぎや町歩く  
綿菓子を持参の友やひなまつり

## 花蜜

埼玉杉淵 真喜子

露地キャベツ炒むるや香の甘きこと  
花待ちて標本木を見るここと  
下駄の緒の黒に小花や春の粹  
ゆつたりと隅田川の春や梅若や  
すくと伸ぶ「閨」の未来仏の座  
春蘭の五花の吹かれて天女の香  
春蘭や初恋は初恋のまま  
裏山に匂ふ自生の春蘭は

## 風光

岩手鈴木智子

裏庭にほつたらかされ露の臺  
その芯の強さ貫はむ冬木の芽  
枯木立鳥のとまるを待ちわびて  
雪解川堰をまあるく落ちにけり  
紅茶飲む窓の日差し春の色  
川舟の棹さすしづく風光る  
みどり濃き葉の艶めける藪椿  
梅東風やはばたくやうに絵馬の鳴り

## 里神楽

岩手 鈴木藤子

手を汚し夢中で摘みし露の臺  
テレビ見て大根ステーキ真似てみる  
狸出たうわさの空家走り抜け  
懸命や里神楽継ぐ児に教へ  
初夢に戦終りて笑む親子  
背なの児が手を伸ばしたる吊し雛  
列乱し薄氷踏む登校児  
春耕や若き当時に戻りたし

## 小なきもの

ウイーン 高橋章子

甲羅とはかく硬きもの多喜二の忌  
囀りやイーストのよく膨らみぬ  
春の泥犬洗ふ吾の獣めく  
佐保姫のお忍びで来る喫茶店  
北窓開く隣家のパンの匂ひふと  
空つぼの部屋の水差し雁帰る  
寅さんのトランク抱へ暮の春  
繩生るG線上のアリアより

## 傘 寿

東京 高橋満利子

さつぱりとさつぱりと立つ冬木立  
よるべなき思ひのよぎる寒の旅  
クラス会元気で勝手傘寿春  
今日あるを僥倖と覚ゆ雛飾り  
春の花名を言ふだけで四方晴れ  
紙を漉く手技の確か女人  
税務署に笑顔を誘ふミモザかな  
煙るごと春の雨降る瓦屋根

## 木の芽和

東京 高橋美智子

手濯ぎの音のかるやか春日覚む  
早春の車窓の光多摩河原  
農家カフエ蔵をぐるりと木の芽垣  
母の味真似てしみじみ木の芽和  
なるがままほうけてをりぬつくつくし  
草餅や粒漉迷ふあの老舗  
童子墓の手編みの帽子忘れ霜  
アートめくガラスの細根風信子

## 風

東京 竹森美喜

「閨丸」舳先に水脈に風光る  
川下りデッキに風の春シヨール  
涅槃西風二天の襷に残る彩  
前傾の頭から行く春一番  
春風や円空 仏の粗削り  
小さき手のしつかり握るつくしんぼ  
満天の星屑降つて花菖に  
春三日月「SLIM」端から落つるなよ

## 梅 一輪

東京 田中 京

椅子使ふ腕立て伏せや春立ちぬ  
梅一輪玉ねぎ微塵の香に勝る  
初成りのレモン九年待ちて手に  
倒木に雨水輝く峠かな  
浚渫の木曾川おほふ春霞  
賜りし露味嚼旨しひとりの夜  
初うぐひす昨夜の雨止む一休寺  
住人より雛多き町海しづか

## 遊 記

東京 寺田幸子

春鷗時に疾走するやうに  
春の潮かもめに遊記きつと在る  
脊梁の如き大川春かもめ  
大川に春の鷗として泛ぶ  
墨堤の一行となる日永かな  
半熟の卵を口に三鬼の忌  
川光るつぎつぎ海月遡り  
街騒に海月は耳を傾ける

### ●備忘録

詩は本音だけだとつまらなくなる。  
日常生活のなかでも本音とフィクションは  
二重になっているんじゃないかな。

谷川俊太郎（詩人）

（令和6年4月28日付「朝日新聞」より）